

1. はじめに

辻垣内遺跡^{つじがいと}は三重県名張市赤目町に所在する。ほ場整備事業にともない、三重県教育委員会によって1982年に発掘調査が行われた。この時の調査結果は、『昭和57年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』（1983年）に掲載済みである。しかし、この報告書では縄文土器に関していえば、出土していることが記述されているものの図や写真はなく、出土縄文土器の具体相を知る上では不十分な報告であったことは否めないであろう。

第IX章で報告した中戸遺跡と辻垣内遺跡は直線距離にして約1.6kmと至近距離にあり、後で詳しく述べるように、時期的にも後期前葉を中心としている点等、共通点が多くみとめられ、両遺跡の位置する名張盆地あるいは名張川・宇陀川水系というひとつの小地域における縄文遺跡の変遷や縄文土器の様相を把握するうえで、ともに欠かすことのできない重要な遺跡になると考える。

筆者は、中戸遺跡出土縄文土器の整理を進行する過程で辻垣内遺跡よりまとまった縄文土器が出土していること、また、大部分が未整理のままになっていることを教示されたおりに、その重要性について指摘して、中戸とともに出土土器の整理を進めることを許可していただいた。付論として、辻垣内遺跡出土の縄文土器を掲載できたのはこうした経緯による。

2. 出土縄文土器の概略

今回、整理を終了し、報告する資料は、縄文土器としてまとめられて整理箱5箱に納められていたものである。辻垣内遺跡からは、他の時期の遺物も含めて約30箱の資料が出土しており、その中にも縄文土器が入っている可能性があるため、辻垣内で出土した縄文土器のすべてに目を通して今回整理したわけではないことを最初に断わっておきたい。ただし、縄文土器としてまとめられていた資料については、

時期判別の可能な資料を中心に、ごく小片を除いてほとんどすべてを掲載することができたので今回掲載した資料をもとに出土縄文土器の大まかな傾向を捉えることは可能であろう。

土器はほとんど大部分が包含層出土であり、一部、土坑より出土したものがある。遺存状況は中戸出土のものと比較して良好なものが多い。また、辻垣内遺跡は遺物が約10万㎡にもわたって散布する広大な遺跡でそのうちの約7,280㎡が調査の対象となり、7ヶ所の調査区に分けて実施されている。縄文土器は大部分がD区とされた約480㎡の面積を有する調査区より出土しているがC区とされた調査区からもややまとまった量出土しており、B区からも少量出土している。遺構出土のものはごくわずかであり、地点による土器のまとまりはとくにみとめられないので、ここではすべての資料を一括して、従来の編年の成果にしたがって時期別に記述していくことにした。

3. 縄文土器の分類

縄文前期末葉（図2-1） 確認したのは1の1点のみである。口縁部が大きく外傾する深鉢で山の低い波状口縁を呈する。口辺に、Σ状原体で刻みを施した低い三角隆帯を横走させる。口唇部にも同様の原体で刻みを加え、内面にも縄文を施す。大歳山式に比定できる。

縄文中期前葉（図1-3、図2-2） 2は船元式前半期に特徴的な撚りのゆるい縄文を縦走させる。器壁の厚さから判断して船元ⅡないしⅢ式に属するであろう。3はほぼ完形に復元できた有文深鉢。頸部がくびれて口縁部は内湾しながら立ち上がり、7山の波状口縁を呈する。底部は、底縁から中央へ向かって立ち上がる凹底である。器高48.0cm、口縁部径33.5cm、胴部最大径30.8cmをはかる。半截竹管文で頸部に横走る界線を施し、口縁部と胴上部を文様帯とする。外面全体に地文として深淺深となる縄巻縄文を縦走させ、原体の異なる縄文を用いて、口

唇部と口縁部内面に斜行縄文を施している。

口縁部文様は波頂部と波底部からそれぞれ半截竹管文を垂下させ、山形文と逆山形文を描く。描き方は一筆状に続けずに左右それぞれ下方へ描きおろしている。7つある波底部直下の空間のうち、4つの空間のみ山形文で埋めている。胴部には逆山形文を8単位描く。逆山形文の頂部が波底部の位置に対応するように配しているが、波頂部に対応する位置に1単位描いているため口縁部文様の単位数よりも1単位多くなっている（巻首図版1展開写真参照）。以上の文様の施文順序を沈線の切り合い関係をもとに復元すると以下ようになる。

縄文施文→頸部に横走る沈線（界線）→

（A）→波頂部逆山形文→波頂部山形文→界線の追加→波底部山形文

（B）→胴部の逆山形文→界線の追加

この切り合い関係からは、（A）口縁部文様と（B）胴部文様の先後関係は不明であるが、胴部と口縁部の文様が基本的に対応していることを考慮すると、まず口縁部文様を山形波状口縁を目安に描いたのち、口縁部文様を基準に胴部文様を描いたと推測しうる。また、波頂部が均等に割付けられていないという器形上の歪みを口縁部では波底部に山形文を描くことで解消しようとした（幅広の空間のみに描かれている点に注目）のに対して、胴部ではこの部分で口縁部文様との対応にズレが生じたために1単位多く描く結果となったのであろう。

縄文中期後葉～末葉（図1～7、図2～4～9）

4～6は沈線を施してから縄文を加えている深鉢の口縁部。4は口縁部に3本の粘土紐を斜めに貼付け、突起状に作り出す。頸部には綾杉状に沈線を配す。6は口唇上にも縄文を加えている。7～9は縄

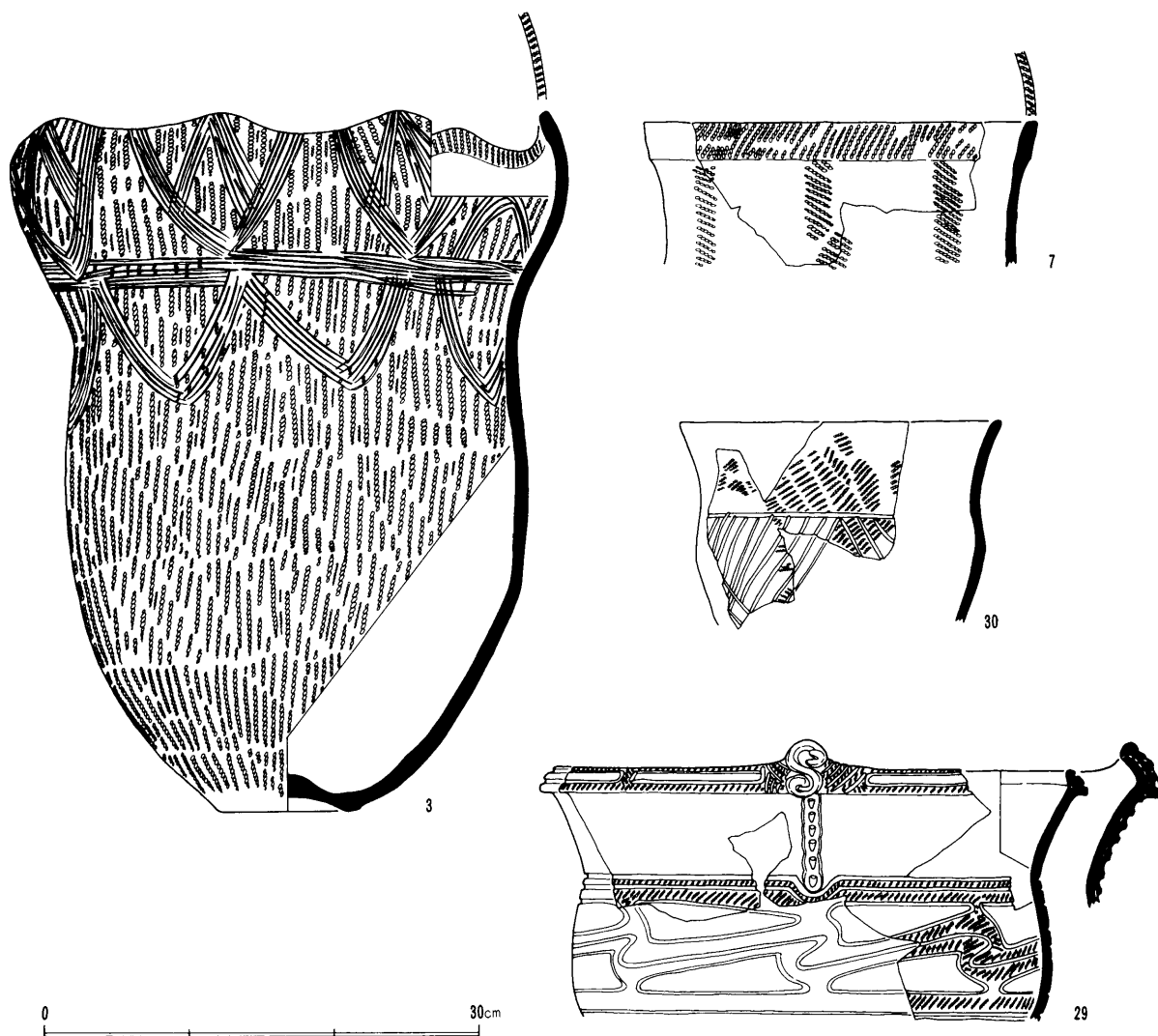


図1 包含層出土の縄文土器（1）（3・29・30），SK2出土の縄文土器（1）（7）

図2 包含層出土の縄文土器(2) (1・2・4~6・10~28), SK2出土の縄文土器(2) (7~9)





図3 包含層出土の縄文土器（3）

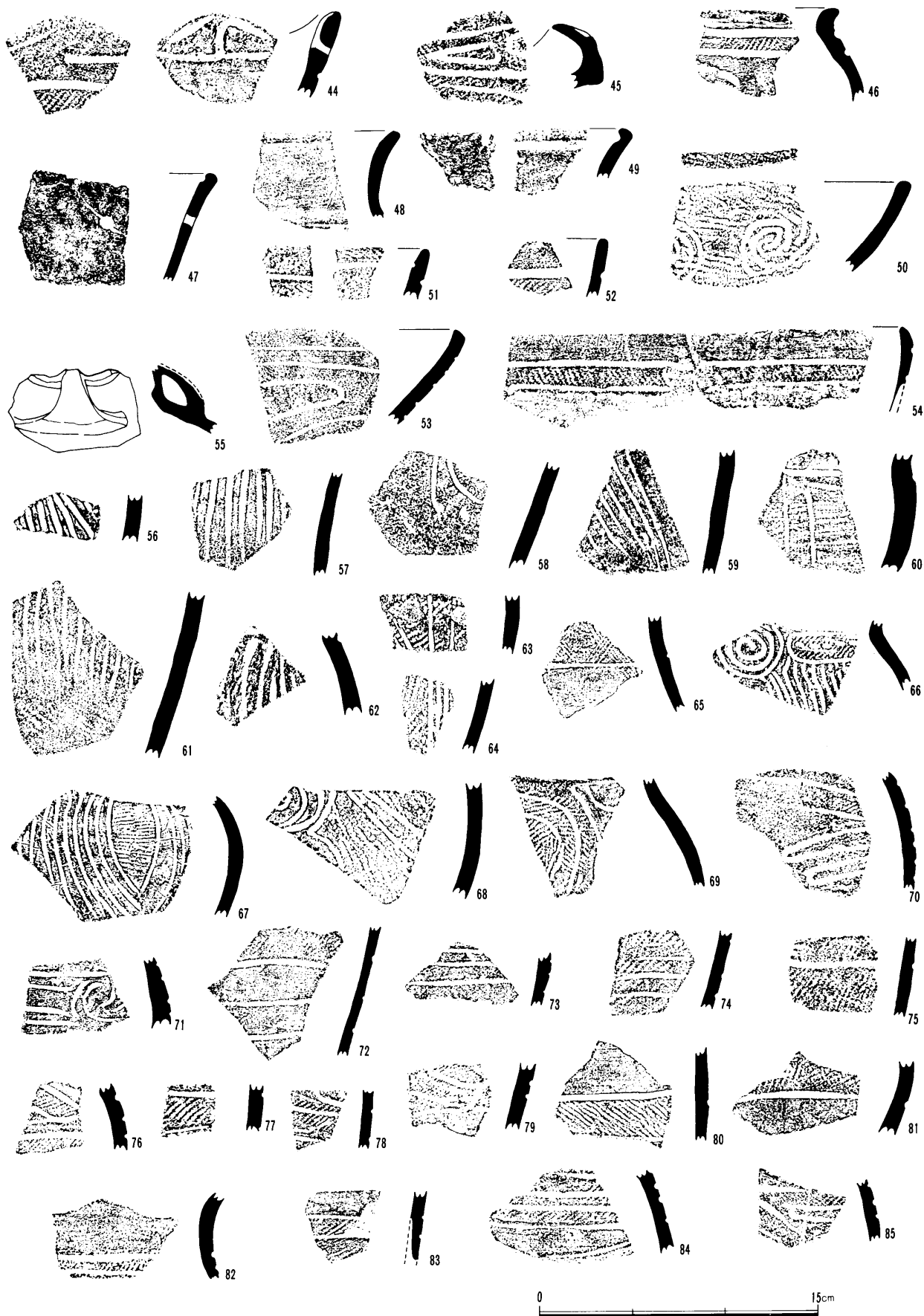


図4 包含層出土の縄文土器（4）

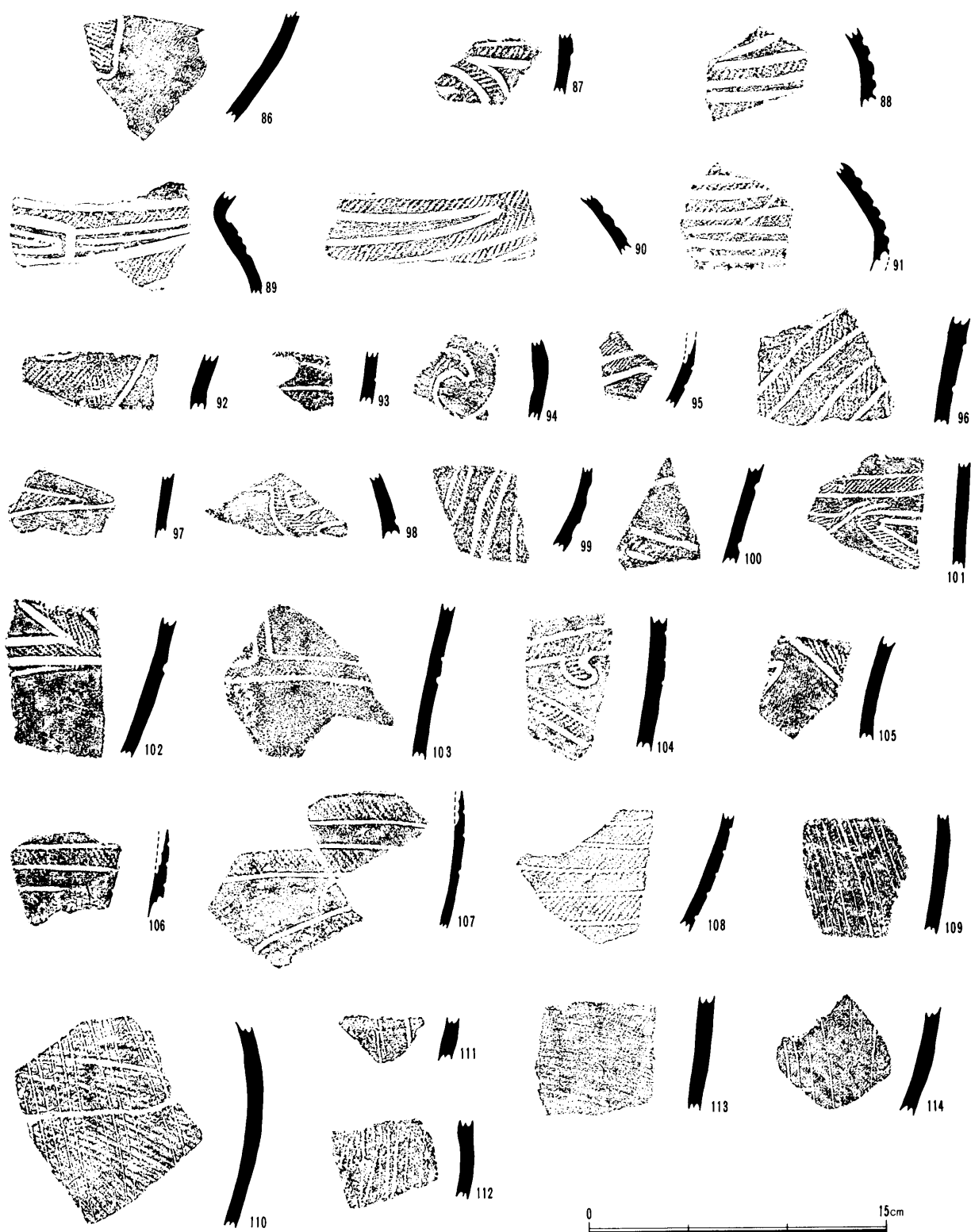


図5 包含層出土の縄文土器（5）



図6 包含層出土の縄文土器（6）

文地深鉢。同一個体で、SK 2より出土した。口縁部外面を幅広く肥厚させ、口唇上と口縁部に横位に縄文を施し、頸部以下には間隔をあけて縦位に縄文を施す。

後期初頭（図2-10） 10は口縁部直下に沈線が1条横走し、頸部には3条1組と推定させる縄文帯が斜行する。後期初頭～前葉の時間幅の中で捉えられよう。

後期前葉（図1-29・30、図2-11～28、図3～図7） もっともまとまって出土した。器形や文様帯・文様の構成の差異等をもとに細別して説明しよう。

a₁類（11～29） 屈曲や肥厚によって区別した口縁部に文様帯を有する縁帯文土器。頸部がくびれる深鉢形を呈し、頸部・胴部にもそれぞれ文様帯（あるいは無文帯）を有するが、全体のわかる例は少ない。口縁部の作出の差異によって次のように細別できる。

a₁類（11～17・27）は口縁部前面を段状に肥厚させるもの。突起部には弧線文や渦巻文、円形刺突、三角形文を配する。文様帯の幅が広く、肥厚もしっかりしているもの（11～14）と肥厚が痕跡的で文様帯の幅が狭いもの（15～17・27）に分離できる。

a₂類（18～26・29）は、口縁部を屈曲あるいは「T」字状に肥厚させて区別しているもの。口縁部は、部分的に突起状に作り出すか、波状を呈する。29は口縁部～胴部まで器形復元できる資料。頸部がわずかにくびれ、口唇部を内外に肥厚させ「T」字状につくる。肥厚した口唇部には「S」字状隆帯を貼付け、突起部とし弧線文を配す。突起間には長方形の区画文を描き、外側に縄文を充填している。頸部には、突起に対応する位置に、隆帯を垂下させ、斜め下方から刺突を加えている。胴部は3条の沈線帯を基本とし、縄文を充填した縄文帯で横に流れる波状の文様意匠を描いている。調整は内外面とも篋で丁寧に研磨して仕上げている。接合しない同一個体の破片があり、頸部に隆帯のはがれた痕跡を有している。突起が何単位になるか厳密に決定することは困難であるが入り組み部が突起下と突起間の中央に配されていると考えたと4単位となる可能性がもっとも高い。23・25は突起部で、23は「S」字状隆帯を横位に、25は縦に2個中央を刺突した円形浮文を貼付ける。25は両側を沈線で画した隆帯が口唇上をめぐるっており、頸部に垂下条線文を施している。26は波頂部。波頂部には直線化した弧線文を配し、長方形区画文が口唇上をめぐる。a₃類（28）は口縁

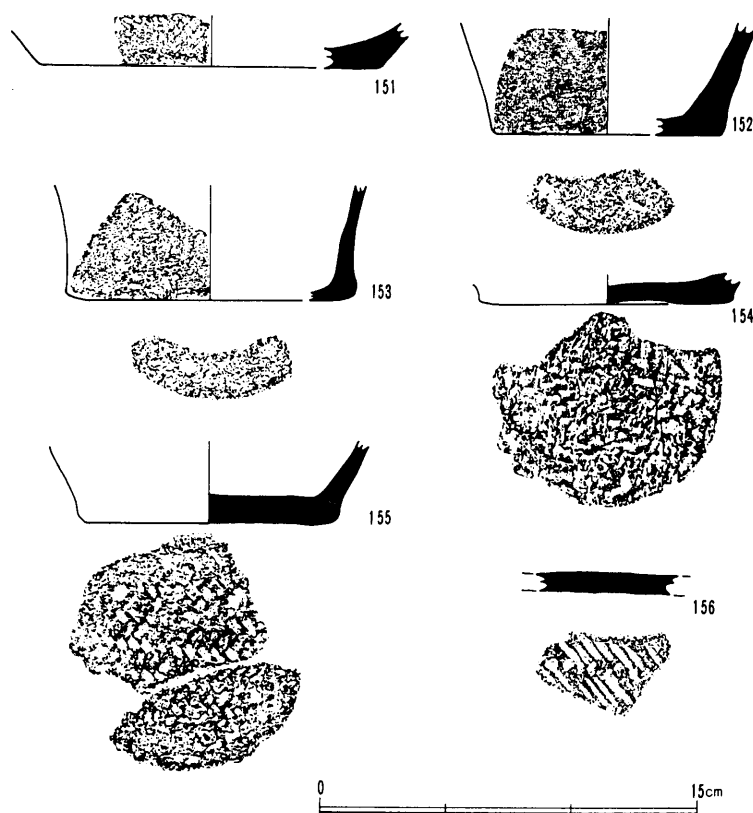


図7 包含層出土の縄文土器（7）

部が内側にシャープに折れ曲がるもの。口唇外側端部が張り出さない点で a₂ 類と区別できる。山の高い波状を呈する。波頂部には直線化した弧線文を配し、波頂間を縄文を充填した長方形区画文でつないでいる。

b 類 (40~42) 口縁部文様帯が内面にあるもの。肥厚しない点でも a 類と異なっている。2 条の沈線を横走させ、41・42 は縄文を充填する。41 はゆるやかな波状を呈する波頂部で円形刺突を加えている。口縁外面にも幅狭く縄文を加えている。

c 類 (30) 口縁部文様帯を省略した深鉢。口頸部は外反する。頸、胴部ともに、地に縄文を施し、頸胴部の境に沈線を一条横走させて界線とする。胴部には多条沈線を複合鋸歯文状に配している。

d 類 (31~39) 東日本に系譜を求められる有文深鉢。バケツ形の単純な形態を呈する。口辺の隆帯の有無で 2 細別する。d₁ 類 (31~38) は口辺に隆帯を横位にめぐらし、部分的に「8」字状浮文を貼付ける。体部には 2 条ないし 3 条の沈線による縄文帯で、三角形を基調とした文様を描く。36 は口唇上にも縄文を施す。隆帯には刻みを加える例が多いが 32 は刻みを加えない隆帯を横走させている。d₂ 類 (38・39) は 3 条沈線による縄文帯が口辺を横走するもの。39 は沈線の末端がクランク状に折れ曲がり、縄文帯を区切っている。

e 類 (43~49) 鉢形の形態を呈するものを一括した。従って、文様構成等でさらに細分しうるものをまとめている。44・45 は波頂部。44 は口辺を縄文帯が横走し、波頂部前面を貫孔し、口縁部内外に沈線をめぐらしている。45 は大きな三角形文の中に小さな三角形文を 2 個対向させ、縄文を充填している。46 は胴部が大きく張り出し、2 条沈線による縄文帯を胴上部に横走させる。口頸部は短く、外方へつまみ上げている。47~49 は口頸部が無文となるもの。47・49 は口縁部内側に凹線がめぐる。

f 類 (50~54) 浅鉢形を呈するものを一括した。50 は口唇および体部に縄文を施し、数条の沈線で「J」字文を描く。51~53 は口辺に縄文帯が横走する。51 は口縁部内面にも沈線を横走させ、口唇との間に縄文を加えている。53 は 3 条 1 組の沈線で、横に流れる文様を描く。54 は器壁が 5 mm と薄く、内外

丁寧な研磨で仕上げている。

g 類 (55) 1 点確認したのみである。口縁部が大きく、内傾する球形の形態を呈し、口縁部より橋状把手がつく。注口土器であろう。

h 類 (115~139) 頸部が無文となる縄文地の土器。ほとんどは深鉢形の形態を呈するが、131・132 は頸部が短く、鉢形の形態を呈するであろう。口縁部縄文帯のあり方で次のように細別する。

h₁ 類 (116~118・120~126) は口縁部前面に縄文を施すもの。口縁部はわずかに肥厚するものとほとんど肥厚しないものがある。124 は疑似縄文を施している。125 は口縁部に縄文を施文し、条線文を頸部に垂下させる。h₂ 類 (115・119・127) は口唇上に縄文を施すもの。127 は粘土塊を貼付けて、突起状に隆起させている。h₃ 類 (128・129) は口縁部内面に縄文を施すもの。b 類と類似するが沈線 1 条のものを h₃ 類に分類した。128 は穿孔を加え、その部分で沈線が半円状となる。h₄ 類 (130) は口縁部内外および口唇上に縄文を施すもの。口縁部外面はわずかに肥厚し、内面には 1 条沈線をめぐらしている。h₄ 類 (131・132) は鉢型を呈し、口頸部には縄文を施さないもの。

133~139 は胴部。133 は頸胴部の境に沈線を横走させる。

i 類 (140~150) 無文深鉢を一括した。頸部がわずかにくびれるかほとんどくびれない単純な形態の深鉢である。

有文土器胴部 (56~114) a 類~g 類に分類した土器の胴部資料となるものを一括した。56~69 は多条沈線が縦位に展開するのを特徴とするもの。63・64 は縄文を施してから沈線を施文するが他の縄文をもつ例は沈線→縄文の充填手法で施されている。65 は横位に沈線をめぐらし、条線文を斜行させる。71 は沈線帯を横位に配し、集約部で渦巻状にする。70・72~108 は縄文を充填した縄文帯で横位あるいは斜位に文様を展開したもの。92~105 は文様構成が斜位に展開するものが主体を占めるもので器形から判断して d 類の胴部となろう。109~114 は垂下条線文をもつ一群。この時期には頸胴部全面に条線文を施す深鉢が器種を構成するが本資料中では条線地深鉢の口縁部資料を確認していないので、a 類を中心と

した深鉢の胴部資料となるものが主体を占めるものと考えられる。一部はh類とした口縁部に縄文をもつ深鉢の頸胴部となるものもあろう。

底部（151～156） 底部の資料は多くなく、6点確認した。いずれも平底で154～156は網代底である。151は胴下部まで縄文を施している。151は縄文中期、他は後期に位置づけられよう。

4. 出土縄文土器の位置づけ

以上、説明したように辻垣内遺跡からは前期末葉～後期前葉の土器が出土している。ここでは、大別した時期ごとに細別時期や系譜等について検討しておきたい。

中期前葉 ほぼ完形復元できた3は、地文に縄巻縄文をもち、間壁編年の船元Ⅳ式に比定できる^①。また、泉拓良氏は西日本の中期の土器を再整理し、「船元・里木式土器様式」を6様式の変遷で捉え直し、その第4様式に本資料を位置付けている^②。縄巻縄文を船元Ⅳ式の型式特徴とする間壁編年にしたがって船元Ⅳ式の範疇で捉えておきたいが山形文、逆山形文の文様意匠や口縁部内面の肥厚帯は船元Ⅲ式につながる古い特徴を有しており、Ⅳ式の古い段階に位置づけられると考える。

中期末葉 SK2から出土した縄文地の深鉢（7）は中期末葉～後期初頭に近畿から東海西部の地域にかけて型式を構成する器種である。本資料のように、口縁部のやや下がった位置に粘土紐を加えて口縁部を段帯状に区別するタイプと口縁部と頸部が形態上、区別されないタイプがある。前者は、大阪府西浦橋^③・仏並^④・小阪^⑤等で中期末葉の土器に伴っており、後者は三重県東庄内A^⑥で後期初頭の土器に伴って出土していて、前者から後者への時期的変遷が捉えられる。本資料は、口縁部が段帯状に肥厚するタイプで、中期末葉に位置づけられる。

後期前葉 量的にまとまっており類別して説明を加えた。a類はいわゆる縁帯文土器で口縁部形態の差異で細分した。a₁類の口縁部前面に文様帯を有するもののうち、文様帯の幅が広く、肥厚もしっかりしているもの（11～14）は北白川上層式1期（後文では北白川上層式を省略し、1期、2期、3期と呼ぶ）^⑦、肥厚が退化しているもの（15～17・27）は

2期に比定できよう。a₂類（18～26・29）は口唇上施文タイプでT字状の口縁部形態、S字・円形の浮文、直線化した弧線文等、2期に特徴的な要素を有している。

29は頸胴部まで統一的に把握できる資料であり、詳しく検討してみよう^⑧。まず、頸部には刻み目隆帯を垂下させる。これは関東の堀之内式にみられる垂下隆帯に系譜を求められるもので縁帯文土器の頸部に取り入れられたものとしてはV字状に隆帯を垂下させている、大阪府縄手第10次出土の例^⑨（2期）がある。胴部の文様は横に流れる縄文帯で、35・54・95も類似した文様構成をとると推定される。

横に流れる曲線文様と三角文様の組合せは、後期前葉期に東北から九州地方という広範囲な地域で採用されており、地域的な系譜を保ちながら多くの文様意匠が生み出されている。本資料の胴部文様と同一の系譜として捉えうる資料は、南東北・関東から東海・近畿・瀬戸内という広域でみとめられる。南東北・関東例は堀之内2式の文様意匠のひとつとしてバケツ形深鉢や鉢に採用されており、西日本では縁帯文土器、東日本に系譜を求められるバケツ形深鉢、鉢、浅鉢、注口土器というように多様な器種で採用されている。

東海・近畿の事例を検討してみよう（図8）^⑩。横に流れる入り組み文様を描き、あいた空間に三角文様を配している点で共通するが、入り組み部や沈線の数等の細部で差異が生じていることがわかるだろう。まず、入り組み部が2条の沈線帯の入り組みで描かれる1～3（仮にa型とする）と1条の沈線が入り組む4～9（仮にb型とする）に大別できよう。b型はさらに沈線の末端が入り組む5・6（b₁型）と末端どおしがつながって一筆描き状になっている7（b₂型）、入り組み部が直線化していたり、入り組み部に三角状の突出部が新たに加えられる8・9（b₃型）に細分できる。4の和歌山県下尾井例は変則的な例であるがb₁型に含めておきたい。このような細部での差異は、一系譜上で捉えられる時間差として理解できよう。a型は、基本的に2条の縄文帯で表現され、三角文を多重にする例があるなど、b型よりも古く位置づけることが可能であろう。下尾井例はa型からb型への変遷過程を示

しているとも考えることもできよう。b型内でも型式学的な時間差は明瞭である。沈線末端が集約部で入り組むb₁型が古く、末端がつながって一筆描きになったb₂型が続き、さらに直線化し、新たな突出文様を加えられるb₃型が新しくなる。b₃型では横走る3本沈線の中央の沈線が入り組み部で、V字形の文様となるがこれは、本資料にみられるような隆帯や8字浮文に規制された半円文に由来し、独立化したと考えられるので、この点でもb₂型→b₃型という時間的変遷が想定しうるのである。

以上、みてきたように本資料の胴部文様はb₂型として位置づけられるが、b₂型の7と比較すれば、入り組み部がさらに直線的になっていることがわかりb₂型の中でも型式学的に新しい様相であることを示している。a型、b₁型、b₂型は2期および併行する東海西部の蜆塚I式⁹の文様意匠として捉えられる。これに対して、b₃型は、近畿には分布せず、東海西部の八王子式⁹の文様意匠のひとつとして採用される。本資料は、広域に分布した文様意匠から八王子式特有の文様意匠が生みだされる過程を物語る資料として重要であろう。

a₃類は口縁部がく字型に屈曲するタイプで、京都大学教養部出土例⁹に類例があり、3期に属する。

b類(40~42)も縁帯文土器の一類型であるが口縁部内面に文様帯を有するもの。いずれも内面の文様帯は肥厚せず、2期~3期の時間幅の中で捉えられる。

c類(30)は口縁部文様帯を省略しているタイプ。本例のように頸部にも縄文を施している例は少ない。複合鋸歯状の胴部文様から2期に含めうる。

d類は関東に系譜を求められる深鉢。口辺に隆帯を横走させるd₁類(31~37)は堀之内2式そのもので2期を構成する器種のひとつである。d₂類(38・39)は沈線の末端がクランク状に折れ曲がる特徴から加曽利利B1式に対比できる。

e類(43~49)は鉢形土器を一括したので、文様帯や細部の形態の異なるものを含んでいる。44~46は横走る縄文帯を有し、2期に位置づけられる。47~49も胴部に帯状の縄文帯を有すると推定される資料で、2期~3期の幅で捉えられよう。

浅鉢形を一括したf類のうち、50は全面に縄文を

加えており、1期的な特徴を保っているが、他は、2期に位置づけられよう。

g類とした注口土器は把手部が1例確認できただけである。

a~g類に分類した有文土器の胴部資料は、56~114にまとめた。このうち、多条沈線が縦位に展開する56~69は1期から2期に、他の縄文帯が横位、斜位に展開する資料は2期に位置づけられる資料が中心となり、91のような沈線が多条化しているものは3期に下がる可能性も有している。109~114の垂下条線をもつ一群は、条線地深鉢となる可能性も有しているが本資料中には口縁部の資料が存在しないので有文深鉢の胴部となる例が中心を占めると想定する。1期では条線文を胴部文様とする例は少ないので、2期の資料が主体を占めるのであろう。

h類とした縄文地土器は、東海西部から近畿・中国・四国地方の縁帯文系土器群に伴出する基本的な器種のひとつである。口縁部に着目すると、肥厚が顕著で前面に縄文帯をもつものから、肥厚が痕跡的となり、器形の外反化を伴いながら、内面や口唇上に縄文帯をもつものへという変化が辿れるが、変化は漸移的で明確な指標をもって区別しうるに至っていない。さしあたって、大きな変化である外面の縄文帯の内面や口唇上への移行がいつ起こっているのかが問題となろう。この点については、2期の基準資料となりうる大阪府縄手第10次⁹、三重県下川原

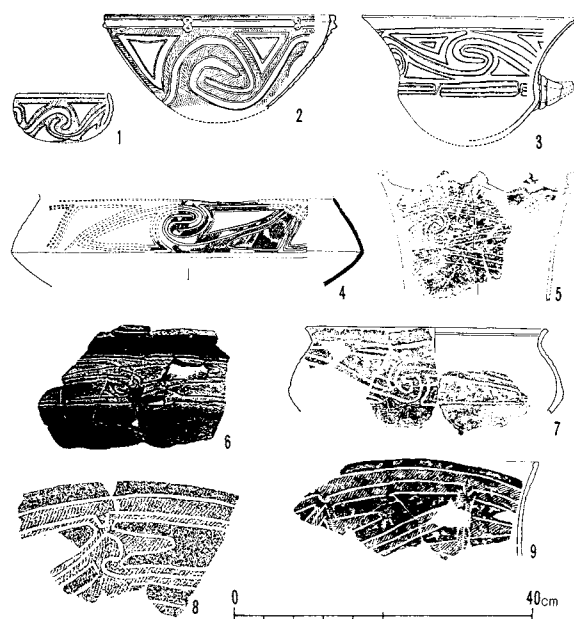


図8 横に流れる入り組み文をもつ土器

SB 9[※]、京都府北白川小倉町[※]では内面縄文帯や口唇上縄文帯は確認されておらず、3期の初期的特徴を有する京都府京都市教養部[※]では内面に1本沈線で画された縄文帯をもつ例が存在するので、2期から3期への変遷過程において内面や口唇上縄文帯への移行が起こっていると想定し得よう。ただし、奈良県竹之内[※]にみられるように外面の縄文帯も3期まで残存しているので、外面縄文帯を2期以前に限定することはできない。このような観点からh類を検討すると、117・118は1期～2期、115・116・119～127は2期～3期、128～130は3期として把握することが可能となろう。

最後に、縄文の撚りの方向について述べる。細別した類のうち、c類（RL 1点）、f類（LR 1点、RL 3点）と有文胴部（LR 2点、RL 3点）については、RL縄文がLR縄文をしのいでいたが、他はLR縄文が優勢を示していた。全体では、LR 37点、RL 18点、L r 2点を数え、LR縄文が優勢な状況を読みとることができるであろう。

5. 辻垣内、中戸遺跡と周辺の縄文遺跡

以上、述べたように辻垣内遺跡は後期前葉を中心とし、そのうちでも北白川上層式2期の土器が主体を占めている遺跡であることが明らかとなった。これを第IX章で報告した中戸遺跡と比較してみると、同じ後期に遺跡の中心を有しながら中戸では後期初頭の中津式および後期前葉の広瀬土壇40段階の土器が主体を占めており、遺跡の繁栄している時期に差があることがわかるであろう。

もう少し、目を広げて検討してみよう。中戸、辻垣内の位置する名張盆地は名張川、宇陀川によって形成されている小盆地で地形的にひとまとまりの地域となっている。この地域の縄文遺跡は名張川左岸（中川原、下川原、奥出、白早稲）、宇陀川右岸（中戸、沢代、赤目壇、垣添、辻垣内、滝野氏城址下層）、宇陀川左岸（城屋敷、辻堂）に群在しており[※]（図9参照）、3つのまとまりで捉えることができる。これらの遺跡群の動向を簡単に眺めてみよ

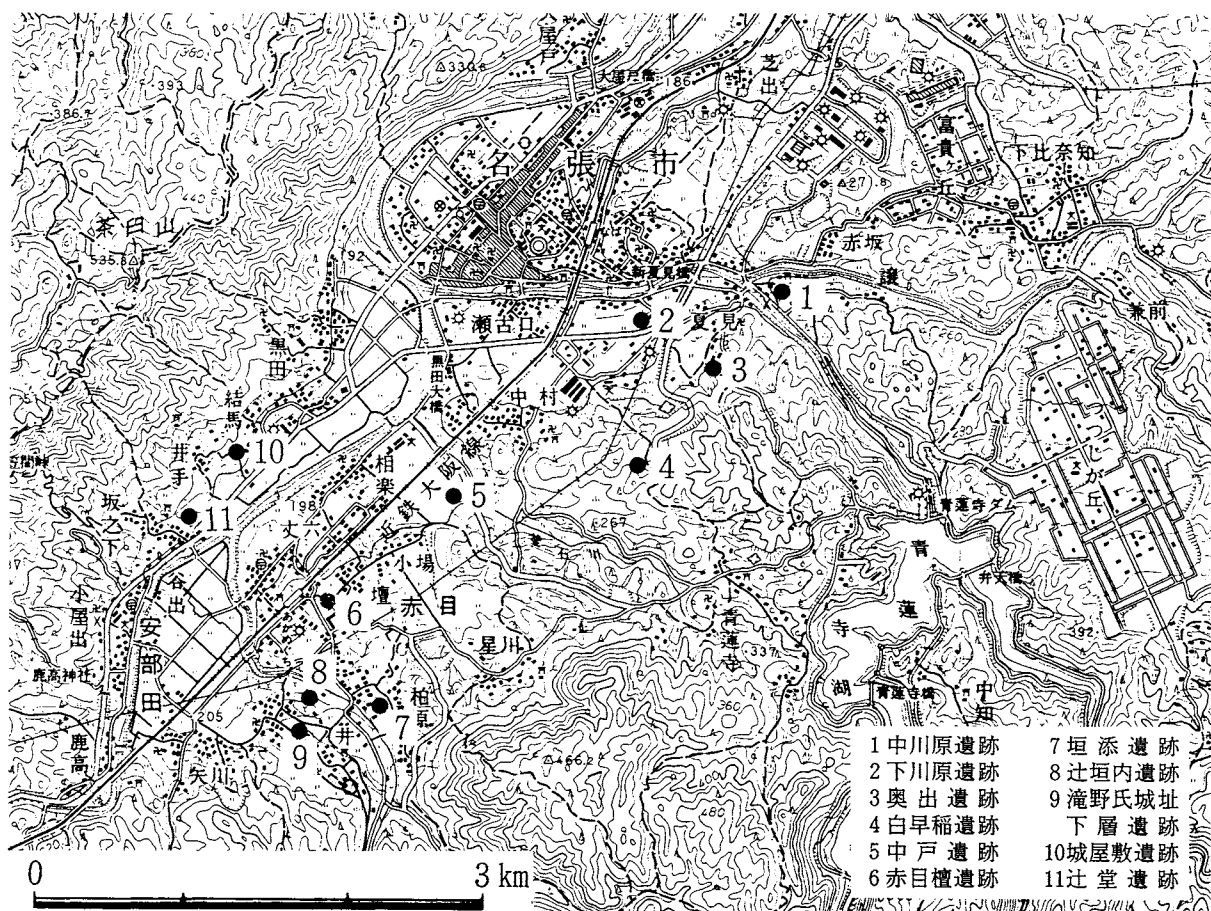


図9 名張盆地の縄文時代遺跡 縮尺1／5万

う。

名張川左岸の遺跡ではやや奥まった丘陵上に立地する白早稲で有茎尖頭器、自然堤防上に立地する中川原、下川原では前者から中期末～後期初頭の土器、後者から後期前葉の土器・石器が出土している。下川原からは北白川上層式2期の住居跡も検出されており、拠点的な集落であったことがわかる。また、丘陵先端の奥出からは晩期終末の土器が出土している。

これに対して、宇陀川右岸の遺跡群では中位段丘面から沖積低地の微高地・自然堤防上に遺跡は立地している。垣添でみつかった早期の押型文土器が最古で、前期・中期は中戸、赤目檀、垣添、辻垣内でそれぞれ異なる型式の土器が少量出土している。後期は中戸、沢代、垣添、辻垣内でみとめられ、中戸では住居跡や埋設土器遺構なども検出されており、拠点集落の様相を示している。晩期は城屋敷で土坑より、終末の東海系突帯文深鉢が出土している。また、中戸、赤目檀、沢代でも晩期終末の突帯文土器がみられるが量は多くない。一方、宇陀川左岸では城屋敷で後期前葉と晩期終末の土器・石器が出土しており、辻堂では晩期終末の土器がまとまってみとめられている。

以上、概観したところをまとめると名張川左岸、宇陀川右岸の遺跡群では縄文早期以降に遺跡の形成が始まり、前・中期には断続的な足跡を残し、後期前半期に繁栄のピークを迎え、晩期終末期に痕跡が認められ、また、宇陀川左岸では後期前葉にわずかな足跡がみられ、晩期終末には安定した遺跡形成がうかがわれるということになる。また、名張川左岸と宇陀川右岸の遺跡群では出土土器は型式を異にして重複する部分は少なく、下川原と辻垣内では両者とも北白川上層式2期を中心としながらも下川原の住居跡出土の土器が1期の特徴を残した古い様相

を示しているのに対し、辻垣内出土のものは3期につながる新しい様相をもったものが主体をしめるなど、細かな存続年代では微妙な時間差を有していると考えられる一方、宇陀川左岸では、城屋敷出土後期土器（北白川上層式2期）や辻堂出土の晩期土器（長原式併行）は、前者は辻垣内・下川原、後者は奥出や滝野城址下層と時期的に重複しており、同時に存在した遺跡と予想できる。

このように考えることが許されれば、名張川左岸の遺跡群と宇陀川右岸の遺跡群は相互に補完的な関係にあり、縄文早期以降、同一の集団によって選択・移動が繰り返し行われた結果、残されたひとつの遺跡群であり、これに対して宇陀川左岸の遺跡群については間を貫流する宇陀川をはさんで別の集団によって形成された遺跡群として解釈することも可能となろう。ただし現状では、早期末～前期前葉、後期後葉～晩期中葉という大きな空白期間が存在する。この状況を同一地域内で地点を変えて存続していると解釈するのか、あるいは別の地域へ移動していると解釈するのかで遺跡群形成や生活領域の範囲の理解も変わってくるであろう。この問題については今後の調査の進展に待つべき部分が大きく、後日の課題としたいと思う。

（謝辞） 辻垣内遺跡出土の縄文土器の整理および報告書への掲載にあたっては、駒田利治氏、山田猛氏に種々御配慮いただき、駒田氏には写真撮影もしていただいた。川崎保氏、穂積裕昌氏には整理作業を共同しておこなっていただいた。また、森下千鶴子氏には前期・中期の土器について、門田了三氏には名張盆地の縄文遺跡について御教示いただいた。

とくに、以上の方々の御援助がなければ本稿をなすことはできなかったであろう。紙幅を借りて、深甚なる感謝の意を申し述べます。

<注>

- ① 間壁忠彦ほか『里木貝塚』 倉敷考古館研究集報 第7号、1971年。
- ② 泉拓良『船元・里木式土器様式』 縄文土器大観 中期Ⅱ、1988年。
- ③ 大野薫ほか『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』、

1984年。

- ④ 松尾信裕ほか『仏並遺跡』 (財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第5輯、1986年。
- ⑤ 合田幸美ほか『小阪遺跡(その6-3)-調査の概要-』、1989年。

- ⑥ 谷本鋭「東庄内A遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告5』、1970年。
- ⑦ 泉拓良「後期の土器―近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』、1981年。
- ⑧ 本資料については、すでに土肥孝氏による言及がある（『堀之内Ⅰ・Ⅱ（Ⅰ・Ⅱ）式土器について』『帝塚山大学縄文文化研究部会研究紀要2』、1988年）が、編年的位置づけについて見解を異にする。
- ⑨ 芋本隆裕「縄手遺跡第10次調査」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要28』、1987年。
- ⑩ 図8に掲載した資料の遺跡名と出典は次の通り。
- 1～3 大阪府縄手；原田修『縄手遺跡』1、1971年。
- 4 和歌山県下尾井；小野山節・清水芳裕編『和歌山県北山村下尾井遺跡』、1985年。
- 5 和歌山県溝ノ口；中尾憲市編『溝ノ口遺跡』1、1984年。
- 6 岐阜県禪昌寺；紅村弘編『東海先史文化の初段階（資料編Ⅱ）』、1978年。
- 7 大阪府淡輪；藤永正明『淡輪遺跡発掘調査概要報告書』Ⅶ、1987年。
- 8 愛知県八王子；池上年「三河國唾豆郡西尾町貝塚に就きて」『考古学雑誌』11-4、1920年。
- 9 静岡県半場；向坂銅二ほか『半場遺跡1978年度発掘調査報告書』、1982年。

- ⑪ 麻生俊「土器」『蜷塚遺跡 総括篇』、1962年。
- ⑫ 久永春男「縄文後期文化―中部地方」『新版考古学講座3』、1969年。
- ⑬ 泉拓良「北白川上層式土器の細分」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度、1980年』。
- ⑭ 前掲注9文献。
- ⑮ 門田了三『下川原遺跡』、1986年。
- ⑯ 梅原未治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告 第16冊』、1935年。
- ⑰ 前掲注33文献。
- ⑱ 松田真「当麻町竹内遺跡試掘調査概報」『奈良県遺跡、調査概報（第2分冊）1984年度、1985年』。
- ⑲ 以下の文献を参照した。また、名張市遺跡調査会の門田了三氏から種々、御教示いただくとともに、未報告の遺跡（奥出・辻堂）への言及を許可していただいた。
- ・田阪仁「名張市赤目・檜・柏原遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告63』、1984年。
- ・水口昌也・門田了三『沢代遺跡』、1985年。
- ・門田了三『名張市井出・城屋敷遺跡』、1985年。
- ・門田了三『下川原遺跡』、1986年。
- ・門田了三『滝野氏城址』、1986年。
- なお、滝野氏城址で検出された縄文遺跡については、城址と区別するため、仮に滝野氏城址下層と呼んだ。

表1 辻内遺跡縄文土器観察表

土器 番号	挿図 図版	地 区	層位/ 遺構	時 期	器 種	色 調	胎土中の 砂粒の種類	調 整	縄文原体	備 考
1	2	DⅩ _e -9	黒褐色 砂質土	前期末葉	有文深鉢	灰褐色	石英・長石・雲母	撫で(B)	R L	
2	"	G-49	—	中期前葉	"	淡白橙色	"	"(")	"	試掘
3	1	DⅩ	5層下部	"	"	淡褐色	"	"(")	R L 縄層	
4	2	DⅩ _e -7	5層 黒褐砂	中期末葉	"	明淡褐色	石英・長石・ 雲母・チャート	二枚貝 条痕(B)	R L	
5	"	DⅩ	排土	"	"	黒褐色(F) 明褐色(B)	石英・長石・雲母	撫で	—	
6	"	DⅩ _r -9	—	"	"	淡褐色	"	"	L Rか	
7	1・2	DⅩ _r -10	SK 2	"	縄文地深鉢	灰褐色	"	"	L R	
8	2	"	"	"	"	暗黄褐色	"	"	"	
9	"	"	"	"	"	"	"	"	"	7～9は 同一個体
10	"	DⅩ _e -10	5層 黒褐砂	後期初頭 ～前葉	有文深鉢	暗黄灰色	"	撫で(F) 筈削り(B)	R L	
11	"	DⅩ _e -6	黒褐色土	後期前葉	"	灰褐色	"	撫で	—	
12	"	DⅩ _d -8	暗茶褐色土	"	"	淡褐色	"	研磨	—	
13	"	DⅩ _e -7	5層 黒褐砂	"	"	黄灰色	"	丁寧な 撫で	—	
14	"	—	—	"	"	淡茶褐色	"	撫で	R L	
15	"	DⅩ _e -8	5層 黒褐砂	"	"	にぶい褐色	石英・長石・ くさり礫	不明	—	
16	"	DⅩ _d -8	暗茶褐色土	"	"	明褐色(F) 赤褐色(B)	石英・長石・雲母	撫で	—	
17	"	DⅩ _d ・e-9	黒褐色土	"	"	灰褐色	"	"	R L	
18	"	DⅩ _e -6	"	"	"	黒褐色(F) 灰褐色(B)	"	研磨(F) 撫で(B)	L R	
19	"	DⅩ _e -6	"	"	"	暗褐色	"	撫で	"	
20	"	CⅩ	1号墳玄 室最下層	"	"	赤褐色	"	"	"	
21	"	DⅩ _e -10	5層 黒褐砂	"	"	灰黄色	"	研磨	"	
22	"	DⅩ	7層 暗茶褐色土	後期前葉	有文深鉢	淡褐色	石英・長石・雲母	研磨(F) 撫で(B)	L R	
23	"	DⅩ _y -6	暗褐色土	"	"	淡褐灰色	"	不明	—	
24	"	DⅩ	7層 暗茶褐色土	"	"	にぶい黄褐色	"	粗い研磨(F) 研磨(B)	—	
25	"	DⅩ _e -7	5層 黒褐砂	"	"	暗黄褐色	石英・長石・ 雲母・角閃石	研磨(F) 不明(B)	—	
26	"	DⅩ _e -6	黒褐色土	"	"	淡褐色	石英・長石・雲母	研磨	L R	

表1 (つづき)

27	2	—	—	後期前葉	有文深鉢	暗褐色 (F) 淡白褐色 (B)	石英・長石・雲母	L R	研磨	
28	"	—	—	"	"	暗褐色	"	"	R L	
29	1・3	D区 d・e-9	黒褐色土	"	"	"	"	"	L R	
30	"	D区	7層 暗茶褐色土	"	"	淡褐色	"	丁寧な 撫で(B)	R L	
31	3	D区 g-7	4層 灰黒色土	"	"	"	"	丁寧な 撫で	L R	
32	"	D区 e-8	5層	"	"	明黒褐色(F) 明淡褐色(B)	石英・長石・雲母 雲母・くさり礫	研磨(F) 撫で(B)	—	
33	"	D区 f-9	5層 黒褐砂	"	"	淡褐色	石英・長石・雲母	不明(F) 研磨か(B)	—	
34	"	D区 e-7	"	"	"	灰褐色	"	撫で	R L	
35	"	—	—	"	"	暗褐色	石英・長石 雲母・角閃石	"	L R	
36	"	C区 w-7	暗褐色土	"	"	淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨	"	
37	"	D区 d-8	暗茶褐色土	"	"	"	石英・長石・雲母	不明(F) 撫でか(B)	—	
38	"	D区 f-10	5層 黒褐砂直	"	"	にぶい褐色(F) 褐色(B)	"	撫で	L R	
39	"	"	黒褐砂	"	"	赤褐色	"	撫で(F) 研磨(B)	"	38と 同一個体
40	"	D区 g-7	4層 灰黒色土	"	"	淡赤灰色	"	研磨(F) 撫で(B)	—	
41	"	—	—	"	"	淡橙色(F) 暗褐色(B)	"	研磨	L R	
42	"	—	—	"	有文鉢	赤褐色	"	丁寧な 撫で	"	
43	"	G-44	—	"	"	暗褐色	"	研磨(F) 撫で(B)	L r	試掘
44	4	D区 d-6	黒褐色土	"	"	明淡褐色	"	研磨か	L R	
45	"	D区 d-7	暗褐砂	"	"	赤褐色	"	撫で	"	
46	"	D区 d・e-9	黒褐色土	後期前葉	有文鉢	灰褐色	"	研磨	"	
47	"	G-4	—	"	"	淡灰褐色	"	"	—	試掘
48	"	D区 d-8	暗茶褐色土	"	"	褐色(F) 暗褐色(B)	石英・長石・角閃石	"	—	
49	"	D区	7層 暗茶褐色土	"	有文浅鉢	淡橙色	石英・長石・雲母	研磨(F) 撫で(B)	—	
50	"	C区 x-7	暗褐色土	"	"	淡褐色	"	撫で(B)	R L	
51	"	—	—	"	"	暗灰褐色	"	研磨	"	
52	"	C区 w-7	暗褐色土	"	"	褐色	石英・雲母・角閃石	撫で	L R	
53	"	D区	7層 暗茶褐色土	"	"	暗黄灰色	石英・長石・雲母	撫で(F) 研磨(B)	R L	
54	"	D区 d・e-9	黒褐色土	"	注口土器	淡橙色(F) 灰褐色(B)	"	研磨	—	

表1 (つづき)

55	4	DⅩ _{e-7}	5層 黒褐色砂	後期前葉	有文深鉢	黄灰色	石英・長石・雲母	撫で	—	
56	"	DⅩ _{e-6}	黒褐色土	"	"	黒褐色	"	"	—	
57	"	DⅩ _{e-7}	5層 黒褐色砂	"	"	灰褐色	"	不明	—	
58	"	DⅩ _{e-6}	黒褐色土	"	"	灰褐色	"	撫で	—	
59	"	DⅩ _{e-7}	4層 黒色土	"	"	暗褐色	"	撫で(F) 削り(B)	—	
60	"	G-44	—	"	"	暗褐色灰(F) 淡白褐色(B)	"	研磨(F) 撫で(B)	—	試掘
61	"	DⅩ _{d・e-9}	黒褐色土	"	"	灰褐色	"	撫で	R L	
62	"	DⅩ _{e-6}	"	"	"	"	長石・石英 雲母・角閃石	丁寧な 撫で(B)	不 明	
63	"	DⅩ _{e-8}	5層 黒褐色砂	"	"	淡褐色 (F) 褐色 (B)	"	不明	R L	
64	"	BⅩ	暗褐色土	"	"	灰褐色	石英・長石・雲母	撫で(B)		
65	"	DⅩ	排土	"	"	明淡褐色	"	撫で	—	
66	"	DⅩ _{e-7}	5層 黒褐色砂質	"	"	淡茶褐色	"	"	L R	
67	"	"	"	"	"	暗褐色	"	"	"	
68	"	"	4層 黒色土	"	"	淡褐色	石英・長石・くさり礫	研磨(B)	R L	
69	4	CⅩ _{w-7}	暗褐色土	"	"	暗濃褐色	石英・長石 雲母・角閃石	撫で(B)	L R	
70	"	DⅩ _{e-7}	5層 黒褐色砂	"	"	褐色	石英・長石・雲母	不明	"	
71	"	DⅩ _{d・e-9}	黒褐色土	"	"	灰褐色	"	研磨	—	
72	"	DⅩ _{北壁}	—	"	"	暗褐色	"	不明	L R	
73	"	CⅩ _{w-7}	暗褐色土	"	"	暗褐色 (F) 明淡褐色 (B)	石英・長石 雲母・角閃石	撫で	—	
74	"	DⅩ _{g-7}	4層 灰黒色土	"	"	黄褐色	石英・長石・雲母	"	L R	
75	"	—	—	"	"	"	"	"	"	
76	"	—	—	"	"	暗褐色 (F) 黄褐色 (B)	"	"	"	
77	"	—	—	"	"	淡灰褐色	"	不明	"	
78	"	DⅩ _{d・e-9}	黒褐色土	"	"	暗灰褐色	"	撫で	"	
79	"	G-49	—	"	"	黄褐色	"	研磨(F) 撫で(B)	"	試掘
80	"	DⅩ _{e-8}	5層 黒褐色砂	"	"	"	"	研磨	R L	
81	"	DⅩ _{e-6}	黒褐色土	"	"	灰黄褐色	"	"	L R	
82	"	DⅩ _{e-10}	5層 黒褐色砂	"	"	黄褐色	"	"	"	

表1 (つづき)

83	4	D× g	7	4層 灰褐色土	後期前葉	有文深鉢	褐色	石英・長石・雲母	撫で	L R	
84	"	D× d・e	9	黒褐色土	"	"	灰褐色 (F) 黄褐色 (B)	"	丁寧な 撫で	"	
85	"	"	"	"	"	"	灰褐色	"	"	"	
86	5	D× f	7	5層 黒褐色砂	"	"	暗褐色 (F) 灰褐色 (B)	"	研磨	"	
87	"	D×		7層 暗茶褐色土	"	"	にぶい褐色	"	研磨	"	
88	"	D× f	7	5層 黒褐色砂	"	"	灰褐色	"	撫で(F) 細密条痕(B)	"	
89	"	C× w	7	暗褐色土	"	"	明淡褐色	"	研磨	"	
90	"	D× d	8	暗茶褐色土	"	"	淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨	L r	
91	"	D× e	8	5層 黒褐色砂	"	"	淡褐色	石英・長石・雲母	研磨(B)	L R	
92	"	"	"	"	"	"	赤褐色	"	撫で	"	
93	"	"	"	"	"	"	黒褐色 (F) 明淡褐色 (B)	石英・長石 雲母・くさり礫	研磨(F) 撫で(B)	"	
94	"	D× e-10		"	"	"	黄褐色	石英・長石 雲母・角閃石	撫で	"	
95	"	D× g-7		4層 灰褐色土	"	"	"	石英・長石・雲母	研磨	"	
96	"	D× d-6		黒褐色土	"	"	にぶい淡褐色	"	研磨(F) 撫で(B)	"	
97	"	C× w-7		暗褐色土	"	"	"	"	研磨	"	
98	"	—	—	—	"	"	灰褐色	"	"	"	
99	"	D× f-9		5層 黒褐色砂	"	"	にぶい淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	"	"	
100	"	D× f-7		"	"	"	赤褐色	石英・長石・雲母	撫で	"	
101	"	D× e-8		"	"	"	淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨	"	
102	"	D×		7層 暗茶褐色	"	"	淡橙色	石英・長石・雲母	"	"	
103	"	D× d・e-9		黒褐色土	"	"	褐色～赤褐色	"	撫でか	"	
104	"	D×		7層 暗茶褐色	"	"	白褐色	"	丁寧な 撫で	"	
105	"	D× e-7		4層 黒色土	"	"	赤褐色	"	撫で	R L	
106	"	D×		7層 暗茶褐色	"	"	暗黄褐色	"	研磨	"	
107	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	106と 同一個体
108	"	G・4		—	"	"	褐色	石英・長石 雲母・角閃石	"	L R	試掘
109	"	D× e-7		4層 黒色土	"	"	黒褐色 (F) 灰褐色 (B)	石英・長石・雲母	撫で		条線地深鉢に なる可能性もあり
110	"	D× e-10		5層 黒褐色砂	"	"	暗褐色	石英・長石・雲母	巻貝条痕	-	"

表1 (つづき)

111	5	G 49		後期前葉	有文深鉢	淡灰褐色	石英・長石・雲母	撫で	条線地彩鉢になる可能性もあり、試掘
112	"	CⅩ _w 8	暗褐色土	"	"	淡褐色	"	不明	"
113	"	DⅩ _d 8	暗茶褐色	"	"	にぶい褐色	石英・長石・雲母・角閃石	撫で	"
114	"	G 49		"	"	暗褐色	石英・長石・雲母	撫で	"
115	6	DⅩ	7層 暗茶褐色	"	縄文地深鉢	暗黄褐色(F) 暗褐色(B)	"	"	L R
116	"			"	"	黄褐色	"	削り後撫で 削り後研磨	"
117	"			"	"	暗黄灰色	"	丁寧な 撫で	R L
118	"	DⅩ _{d・e} - 9	黒褐色土	"	"	淡灰褐色	石英・長石・雲母・角閃石	撫で	L r
119	"	DⅩ _{北壁}		"	"	淡灰褐色	石英・長石・雲母	撫で	L R 120と同一個体
120	"	DⅩ _f 7	5層 黒褐色砂	"	"	暗褐色	石英・長石・雲母・角閃石	"	"
121	"	DⅩ _d - 7	暗褐色砂	"	"	淡褐色	石英・長石・雲母	"	"
122	"	DⅩ _{d・e} - 9	黒褐色土	"	"	灰褐色	石英・長石・雲母・角閃石	"	"
123	"	G 49		"	"	淡褐色	石英・長石・雲母	"	R L 試掘
124	"	DⅩ	7層 暗茶褐色	"	"	暗褐色	"	"	巻貝擬縄文
125	"	CⅩ	1号墳玄 室最下層	"	"	にぶい淡褐色	"	"	R L
126	"	DⅩ _{北壁}		"	"	暗黄褐色	"	"	"
127	"	DⅩ _d - 6	黒褐色土	"	"	にぶい淡褐色	"	"	L R
128	"	DⅩ _e 8	5層 黒褐色砂	"	"	"	"	"	"
129	"	"	"	"	"	赤褐色	"	"	128と 同一個体か
130	"	BⅩ	暗褐色土	"	"	黄褐色	"	"	R L
131	"	G 3		"	縄文地鉢	淡褐色	石英・長石・雲母・角閃石	研磨	L R 試掘
132	"	"		"	"	"	"	"	131と 同一個体
133	"	DⅩ _{d・e} - 9	黒褐色土	"	縄文地深鉢	淡赤褐色(F) 黄褐色(B)	石英・長石・雲母	撫で	R L
134	6	DⅩ	7層 暗茶褐色	後期前葉	"	暗黄褐色	石英・長石・雲母	"	L R
135	"	"	"	"	"	淡灰褐色	石英・長石・雲母・くさり礫	"	"
136	"	CⅩ _w 7	暗褐色土	"	"	明淡褐色	石英・長石・雲母	"	"
137	"	DⅩ _e 10	5層 黒褐色砂	"	"	暗茶褐色	"	"	R L
138	"	CⅩ _w 7	暗褐色土	"	"	明淡褐色	石英・長石・雲母・くさり礫	"	L R

表1 (つづき)

139	6	C区 w-7	暗褐色土	後期前葉	細文地深鉢	にぶい淡褐色	石英・長石・雲母	撫で	L R	
		"	"	"	"		石英・長石・	"	"	
140	"	D区	7層 暗茶褐色	"	無文深鉢	淡褐色	"	筥撫で	――	
141	"	G-47	――	"	"	暗褐灰色(F) 淡白灰色	"	丁寧な 撫で	――	試掘
142	"	――	――	"	"	灰褐色	"	撫で	――	
143	"	D区	7層 暗茶褐色	"	"	にぶい黄褐色	石英・長石・ 雲母・くさり礫	"	――	
144	"	D区 e-8	5層 黒褐色砂	"	"	暗赤褐色	石英・長石・ 雲母・角閃石	"	――	
145	"	"	"	"	"	黄褐色	石英・長石・雲母	"	――	
146	"	D区	7層 暗茶褐色	"	"	淡茶褐色	"	板撫で(F) 撫で(B)	――	
147	"	"	排土	"	"	暗黄褐色	"	条痕(F) 削り(B)	――	
148	"	――	――	"	"	褐灰色	石英・長石・ 雲母・角閃石	巻目条痕(F) 不明(B)	――	
149	"	C区 w-7	暗褐色土	"	"	にぶい褐色	石英・長石・雲母	巻目条痕(F) 撫で(B)	――	
150	"	G-4	――	"	"	淡灰黄色	"	条痕(F) 削り後撫で(B)	――	試掘
151	7	C区 w-7	暗褐色土	中期?	深鉢	淡褐色	"	撫で	L R	平底, 内面煤付着
152	"	――	――	後期	"	褐色(F) 灰褐色(B)	"	研磨	――	"
153	"	――	――	"	"	灰褐色	"	撫で	――	"
154	"	D区 d・e-9	黒褐色土	"	"	淡橙褐色	石英・長石・ 雲母・くさり礫	"	――	網代底
155	"	"	"	"	"	淡黄灰色	"	"	――	"
156	"	――	――	"	"	暗黄灰色	石英・長石・雲母	"	――	"

凡例 ①胎土中の砂粒の種類は肉眼で識別できたものを示す。

②色調・調整のFは外面、Bは内面をさす。

表示のないものは内外同一である。